

# 下田歌子記念女性総合研究所 ニューズレター

No.15  
2020年7月

## 『創立120周年記念 実践女子学園史(1999 - 2018)』の 刊行を終えて



実践女子学園  
創立一二〇年史編纂委員会  
委員長

湯浅 茂雄

2020年3月31日付けで『創立120周年記念 実践女子学園史(1999 - 2018)』(全591ページ)の刊行を終えたので、その経緯を報告するものである。

本書は実践女子学園創立120周年記念事業の一環として企画され、その企画、編集の任にあたったのは「実践女子学園創立一二〇年史編纂委員会」である。編纂委員会は既に、2019年5月7日に行われた120周年記念式典に合わせて『学校法人実践女子学園 創立一二〇周年記念写真集』を刊行している。これに続き、記念式典の内容を記録する必要がある、これを含めて、100周年以降の20年間の学園史を編纂、刊行したものである。これをもって、実践女子学園創立一二〇年史編纂委員会は全ての任務を終えたことになる。

本書の内容は、書名に『実践女子学園史(1999 - 2018)』とあるように、『実践女子学園一〇〇年史』以降の20年間の学園史である。100年史以降の補遺版といえようか。ただし、資料編に附載した「年表」は、以前の年表の誤りや遺漏を補う必要があり、1854(安政元)年から2018(平成30)年までのものとなっている。



2015年10月に設置された第1回編纂委員会から起算すると4年半の歳月を費やしたことになる。もともと下田歌子研究所(現下田歌子記念女性総合研究所)は、その事業計画の一つとして学園史の編集を行うことが定められていたため、委員長は所長であった湯浅が務めた。退任後も委員長は継続する必要があったため、最後まで編纂業務に関わることとなった。その事務も、事務長、職員の交代もあったが、一貫して下田研究所の事務職が兼任した。編纂委員は、基本的には学園史の全体の構想や体裁の立案と、執筆者への依頼や調整の任にあたった。本文は、これら編纂委員の分担執筆という形は取らず、各学部学科、研究所、課程、事務部門の方々に依頼した原稿をもとに編集したものである。編纂委員は(副委員長及び委員の交代も含め)22名、執筆者は教学部門だけで33名に及んだ。

執筆依頼にあたり、書式の体裁等についての執筆要項を示したが、内容については各部署にお任せした結果、書きぶりの不統一や項目の遺漏が少なからず見出された。これらの統一や補遺は編纂委員に加えて、教学部門においては各学部長に、事務部門においては事務部長にお願いした。また、全体的なチェックは小林修理事長特別顧問、安達勉常勤監事に多大なご助力をいただいた。本書の刊行に関わっていただいた全ての関係者に心から感謝申し上げる。

また、題字をご無理をお願いし、井原徹前理事長に書いていただいた。(1999 - 2018)の20年間は、渋谷棟の建設とそれに連動する教学改革を含め、学園が大きく動いた時期であり、井原前理事長なくして語れない時期である。編纂委員長としては、題字をいただけたことは誠にありがたいことであった。前理事長にはコラム「この20年を振り返って」もご執筆いただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

最後に、編集後記にも記したが、この補遺版ともいべき学園史が、今後編纂される通史(150年史など)としての学園史の確実な基礎資料となることを願うばかりである。(ゆあさ しげお 本学教授)

## 『創立120周年記念実践女子学園史』の編纂を終えて



理事長特別顧問  
小林 修

理事長からの委嘱により、この2年間にわたって学園創立120周年を記念する学園史の編纂に携わって来ました。創立百周年の折、過去何度かの周年期に編纂された学園史を踏まえて浩瀚な「学園百年史」が刊行されましたので、今回はそれ以後の20年間を中心に編纂することになりました。1999年から2018年までに相当するこの20年間は、急激な少子化による受験生の激減、就職氷河期と呼ばれた卒業生への深刻な影響など学園を取り巻く状況は全国的に厳しい時代の始まりでした。さらに長引く不況はリーマンショックによる世界不況へと拡大、続く東日本大震災及び原

発事故などの大災害といっそう厳しさを増す中、学園は様々な教育変革を重ね無事120周年を迎えた時代でありました。その貴重な歩みの記録が今回の『創立120周年記念実践女子学園史(1999-2018)』として結実したと思います。

また、資料編の「年表」は学祖生誕から学園創立を経て「学園創立120周年記念式典」に及ぶ165年間の歩みを記録しました。これは「百年史」の年表にその後の20年を増補したばかりでなく、「下田歌子研究所」によって大幅に補訂を加えた学園史年表稿本をもとに、一つひとつの項目の根拠資料をもう一度確認し、不明なものはさらに他の資料を探索し確定しながら定稿化するという困難な作業でした。さらに学園創立以前の下田歌子に関しても、その後の研究成果を踏まえて改定増補しました。こうした編纂作業に従事することによって、学園の長い歴史の重さを再確認することができたことが、何よりも良い体験でした。この成果が次の「150年史」に受け継がれて行くことを願っています。

(こばやし おさむ)

## 『創立120周年記念実践女子学園史』を監修して



常勤監事  
安達 勉

創立120周年を記念する年史と写真集の発行が企画され、両者の編纂作業がいよいよ本格化しようとする2018年春に、小林修短大名誉教授とともに監修者に指名されました。

私は先ず、2019年4月末の完成を目指した写真集の監修に携わり、本文の表記の統一や図版キャプションの調整を行いました。加えて箱根等の実習所に関する原稿執筆も行うなど、全頁にわたって確認し助言しました。

年史編纂では、原稿依頼の段階では漏れていた事柄、たとえば「教学グランドデザイン策定会議」「就

業規則整備」等いくつかの項目について、特筆すべき事柄として新たに原稿を起こし、また「東日本大震災」の項では複数の原稿を一本にまとめる作業を行いました。私の半世紀近い奉職の中で、学園中枢にいた直近の十数年間は記憶が比較的鮮明でしたので、事務部門の原稿にはその殆どに手を入れさせてもらいました。執筆者の言わんとするところを最大限に汲みとるべく、推敲を重ねたものです。

この20年間はまさに混沌とした時代でしたが、終始ブレずに舵取りしてきた学園経営の足跡をこの年史から読み取っていただき、今後、新事業を展開する際には「過去の実績」として参照していただくと幸甚です。記憶は人によって区々で見方も一面的になりがちですので、会議録や公式記録あるいは各種データといった揺るがない裏付けが肝要です。中期計画・年次計画、各年度の事業報告に加え、裏付けとなるデータ類を積み重ねて「歴史の証言者」とすることにより、次の年史編纂に備えていただければありがたいです。

(あだち つとむ)

## 「大学の価値は卒業生が決める」



兼務研究員

深澤 晶久

思いがけない新学期を迎えた4月末、社会人4年目を迎えた卒業生8人に声をかけ、今期授業でも活用しているオンライン会議ツール Zoom の小部屋に集合してもらいました。彼女たちは、2014年から学内の「東京2020オリンピック・パラリンピックプロジェクト」のファウンダーとして大活躍をしてくれたメンバーであり、卒業生たちのキャリアの変遷として時系列で追いかけています。在宅勤務が長期化している者から、通常通りほぼ毎日通勤している者まで、置かれている環境は様々でしたが、卒業生としての矜持を胸に、そろそろ中堅社員の仲間入りと同時に、後輩の人材育成に携わる場面を迎えており、“一皮むけた感”が画面を通じてひしひしと伝わってきたことに感激もひとしおでした。

思えば今から6年前の2014年前期、私が実践女子大学へ奉職し、最初に担当させていただいたのが「国際理解とキャリア形成」という科目でした。初めての教員生活で右も左も分からず悪戦苦闘している中、授業を牽引して、さらにオリンピック・パラリンピックプロジェクトに自ら手を挙げてくれたのも、このメンバーでした。「東

京2020の中心地にある実践女子が、全国の大学のハブ機能を目指そう」という壮大な目標の下、本学における東京2020への様々な取り組みがスタートしたわけです。今まさにキャッチフレーズにもなっている「実践の実践」の基礎を作ってくれたといっても過言ではないと思います。6年間にわたり学生たちの姿を見つめながら感じる、それは実践女子大学の学生のポテンシャルの高さです。そして、先輩たちの姿から、その可能性はより磨かれ、魅力溢れるものへと昇華していくことも事実ではないかと思えます。

今まさに社会で求められている「主体性」と「人を巻き込む思考力」に溢れた彼女たちの活躍が「JISSEN BRAND」の飛躍的向上に繋がると確信し、引き続きフォローしていきたいと思えます。

翌週には、オリパラプロジェクト2期生となる、一つ後輩の7人にも集まってもらいました。「ニューノーマル」時代の到来の中、「優しい想像力」を磨き上げながら、彼女たちのキャリアが描かれていくことを心から期待したいと思います。（ふかざわ あきひさ 本学教授）



### オリパラプロジェクト1期生の「社会人4年目の抱負」(すべて2017年3月卒業)

飯田 江美	国文学科卒 人材ビジネス	4年目を迎えて着々と出来る事が増えている実感がありつつも、漠然とした不安があるというのが本音です。ターニングポイントになるこの1年を実りある物にする為にも、日々の業務に真摯に取り組みたいです。
北岡 瞳	国文学科卒 ウェディングコーディネーター	これまでの3年間を通して、既存業務の進め方を取得してきました。今年は基盤を整えると同時に、社会の変化に対応できるような人材になるべく、「新しい自分」を確立し実現できるようにします。
広瀬 莉奈	英文学科卒 ホテル	入社から箱根のホテルでフロントを務めており、4年目の今年からはビジネスホテルの宴会場の営業に異動となりました。職種は違えどお客様に対する思いは変わらずに自主性に重きを置いて活動していきます。
藤林 麻衣	英文学科卒 ホテル	「物怖じせず新しいことに挑戦し、思い切り失敗しなさい」と先輩に言われてきました。そんな憧れの先輩を目指して4年目。今は新入社員との出会いの時期。後輩たちが「挑戦できる職場づくり」が今年の目標です。
吉田真由子	英文学科卒 和菓子製造販売	社会人4年目となり、仕事の全体像が少しずつ掴めてきたように感じます。今後は3年間の経験をもとに、より円滑な店舗運営と、後輩の育成に取り組んでいくと共に自分自身もより成長していけたらと思います。
若山 理沙	英文学科卒 IT コンサルティング	SEとして4年目になり、現在は3年掛かりのプロジェクトメンバーとして仕事をしています。直接お客様に設計書を見て頂く機会もあり、成長できる環境に感謝の毎日です。これからも勉強を重ねていきたいと思えます。
五十嵐千晶	美学美術史学科卒 運輸サービス	4年目の今年サブリーダーになり、チームをまとめ、後輩を指導する立場となります。先輩から学んだこと、また、自身の失敗なども含めた3年間の経験を武器に、今後は後輩の指導に力を入れたいです。
鵜田 沙弥	美学美術史学科卒 建材メーカー	大学の価値を高める存在でありたい…そんな気持ちで4年目を迎え、社会で活躍する同期とのZoom会議を通じ、共に過ごした仲間が支えだと実感しました。その気持ちを糧にまた、前を向き頑張りたいと思えます。



# 保育実践家 Vivian G. Paley の保育に関する研究



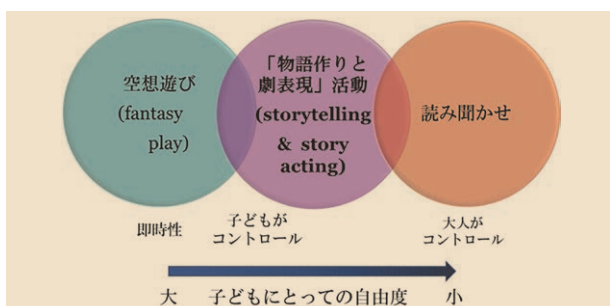
兼務研究員  
松田 純子

筆者の専門分野は、保育学・幼児教育学です。ここでは、筆者の研究の一端をご紹介します。

筆者が研究の対象としているのは、保育実践家として40年近くの経験を持ち、著述家としても知られる米国の Vivian G. Paley (ヴィヴィアン・G・ペイリー) です。この卓越した保育実践家の眼を通した「子ども理解」とそれに基づく保育実践の意義を捉え直そうとしています。科学的根拠に基づいた保育実践は、今やトレンドではありますが、一方で優れた保育実践が包含する経験知を新たに捉え直すことも重要であり、それを自ら語るができる稀有な存在が Paley です。

Paley は、1929年にユダヤ系移民の子として米国シカゴに生まれました。大学卒業後、小学校教師を経て、シカゴ大学実験学校の幼稚園に迎えられています。彼女の長年に亘る興味深い保育実践と思索の記録は、独特の語り (narrative) の様式で、13冊の著書にまとめられています。Paley の保育の「物語」は広く共有され、彼女は現役を引退後も、米国内外の保育現場に招かれ、保育者らとの対話を続け、多くの保育者のメンターとして活躍しました。残念ながら、2019年、90年の生涯を閉じています。

Paley の保育の実践の根底にあるのは「遊び」です。特に幼児期に盛んな空想遊び (fantasy play) が重要な柱となります。彼女は、子どもが自由に創造し表現する物語に現れる成長のモチーフに着目し、それらの物語の背後にある意味 (子どもなりの論理) を丁寧に読み解こうとします。また、それに独自のシンプルな形式を与えたものが「物語作りと劇表現 (storytelling and story acting)」の活



動です。この活動を通じて、言語化された子どもの内面世界 (物語) が保育室の「舞台 (stage)」で表現されます。Paley は、この活動を、空想遊びの延長として、日常的に行う絵本の読み聞かせと同様に、自らの保育カリキュラムの中心的な活動として位置づけました (図1)。

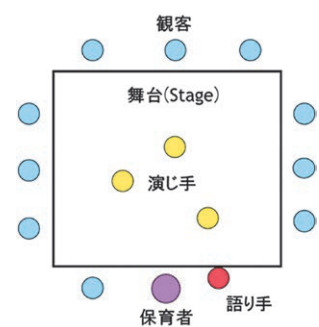


図2 劇表現 (story acting) 活動

実際には、子どもが自由に語る物語を保育者がノートに書き取ります。同日、子どもたちは保育室の簡易な舞台を囲んで集まり、そこで一人ひとりの物語が即興で演じられます (図2)。子どもは、物語の「語り手 (作者)」、「演じ手」、「観客」のいずれかの役割で活動に参加し、保育者はナレーター兼舞台監督の役割を務めます。心理学者 Michael Cole が、Paley のこの活動を、子どもにとって “true extension of play”<sup>1)</sup> (真の遊びの延長) と評していますが、Paley 自身も、子どもたちが物語を一緒に演じることは「一緒に遊ぶ」と同じと考えました。

注目すべきは、継続した活動として取り組む中で、普遍的な発達上のテーマが現れるということです。例えば、Fantasy、Fairness、Friendship という、Paley が「3つのF」と呼ぶテーマです。子どもたちは、これらのテーマが現れると、持てる言葉や知的能力の限界まで熱心に議論をしようとするので Paley は述べています<sup>2)</sup>。このような知見は、幼児期の発達課題を考える上でも大変興味深いものです。

Paley は、子どもの表現する物語を分析する代わりに、子どもと共にそれを楽しみ、意味を考え、関係づけながら、物語として理解しようとしてきました。その試み (問い) が、Paley の保育を創っていきます。Paley の「物語作りと劇表現」活動は、画期的な子ども理解の手法であり、同時に優れた保育の方法モデルと言えます。現実の子どもの個別性と具体性に対応しながら、集団の活動としても楽しく有意義で、日本においても、子ども主体の「遊びを中心とした保育」を実現する大変有効な方法として、大きな可能性を持っていると筆者は考えています<sup>3)</sup>。(まつだ じゅんこ 本学教授)

[注]

- 1) Paley, Vivian Gussin., *Mollie is Three: Growing Up in School*, Chicago and London: The University of Chicago Press, 1988 Paperback edition, p. xi.
- 2) DVD 資料 *Storytelling Themes with Vivian Gussin Paley* : Ball State University.
- 3) 松田純子「保育の実践と子ども理解 —保育者 Vivian Paley の保育実践から考える—」『幼児教育学研究』第21号、2014、p. 13～23.

# 新編下田歌子著作集『良妻と賢母』（久保貴子校注・解説）刊行

—「新編著作集」第一期完結—



専任研究員

久保 貴子

下田歌子が、生涯において残した著作の数は、同時代の女性の中でも群を抜いています。その著作には、深い教養と揺るぎない主張がふんだんに込められていて、読者を魅了してやみません。しかし、その著作は現在絶版となったものが多く、一般の方が目にする機会はほとんどありません。女性の一層の活躍が求められる現代にこそ、日本の女性の生き方を真摯に考えた下田歌子の著作は、あらためて読み直す価値があると言えます。

本研究所では、その中でも現代社会や女子教育に資するところが大きいと考えられる作品を選び、「新編下田歌子著作集」と銘打って年に一冊のペースで刊行してきました。『婦人常識訓』、『女子のつとめ』（現代語訳）、『女子の心得』、『結婚要訣』という既刊に加えて、2019（平成31 / 令和元）年度には5冊目となる『良妻と賢母』を刊行しました。およそ1世紀の歳月を隔てた現代の読者に供するにあたって、典雅な和文である原文を尊重しつつも、文語調で読みにくい部分や人名、歴史的な出来事を中心に注を施しました。わかりやすく生まれ変わった「新編著作集」を通して、下田のことに触れ、現代の女性さらには未来の女性を考える糧にしていきたいと思えます。

さて『良妻と賢母』の底本は、「女子自修文庫」の最後の一冊（第五編）として明治45（1912）年に富山房から出版されました。明治30年代から大正の初めにかけて、下田歌子は文庫や全書など纏まりのある著作を矢継ぎ早に世に問うていました。本書は、まさに脂が乗りきっていた時期の著述です。

ところで下田歌子の女子教育といえば「良妻賢母」ということがキャッチフレーズのようについてまわることが否定できません。実際に本書は、下田歌子の

教育観・思想を代表する著作として受け止められてきました。「新編著作集」の本書の「帯」に、「洋の東西の心に響く逸話を引きながら、妻、そして母の大いなる役割を説く。下田歌子の代表的著作。」と記されているのも、そうした本書の特質をよくあらわしています。

下田は洋の東西の「良妻」や「賢母」の実例をあげて、自らの確信する「良妻賢母」像を構築していきます。さながら「良妻」や「賢母」の実例集、コレクションといった趣があります。そこで記される例は、高貴な人々だけではなく当時卑賤と考えられていた階層にも及んでいることは注目に値するでしょう。

明治後半からの女子教育のイデオロギーに「良妻賢母の育成」があったことはよく知られています。その意味で下田の思想がこのような国家的イデオロギーと親近性があったことは否定できません。しかしながら、一方で下田は本書の中で「良妻」の概念が時代と共に変わることも述べています。他にも、本書の「良妻賢母」が国家イデオロギーとは本質的に異質な、より役割分担的な概念であることを示唆するような記述もあります。

下田は女性の社会進出を願っていました。新しい女性の生き方を探究しようとしていました。国家的・体制的なイデオロギーとは違った観点から読み直すとき、本書は新しい相貌を示すように思われます。

以下、本書の「目次」を掲載します。なお、「新編著作集」は今後も随時、続刊を予定しています。

（くぼ たかこ 本学専任講師）

## 『良妻と賢母』- 目次 -

緒言

### 【上編】

- 第一章 妻の範囲
- 第二章 何をか良妻と云ふ
- 第三章 東洋の良妻伝
- 第四章 西洋の良妻伝

### 【下編】

- 第一章 母の範囲
- 第二章 何をか賢母と云ふ
- 第三章 東洋の賢母伝
- 第四章 西洋の賢母伝

良妻と賢母のうしろに



（四六判、222頁、三元社、2020・3・31 発行、本体2200円＋税）

## 第3回 実践の現代史・ナラティブ（語り）

今回みなさんにご紹介するのは、100周年記念事業をきっかけにして、2009年に学園史資料室と実践桜会が合同で行った卒業生インタビューです。下田歌子先生を直接ご存知の卒業生に行った貴重なインタビューですが、残念ながらこれまでほとんど紹介されてきませんでした。そこで、これから数回にわたり、その概要をお伝えしたいと考えています。

さて、今回は、元桜会会長で本学園理事を務められた故戸野原須賀子さんです。戸野原さんは、学生のための奨学金（現、実践チャレンジ奨学金）を設立してくださるなど、本学に多大な貢献をされました。創立100周年の記念事業の一環として作成されたVTR「はばたけ！ わが娘らよー下田歌子の生涯」（2002年）でも、下田先生の思い出を語られています。戸野原さんが実践女子専門学校を卒業した昭和11（1936）年は、下田先生が82歳で他界された年です。インタビュー当時は94歳。戸野原さんは、下田先生から直接学んだ最後の世代であり、このインタビューは生前の下田先生について、卒業生からお話を伺う最後の機会でもありました。インタビューの内容は多岐にわたりますが、以下では当時の実践の様子と下田先生の最期のご様子を中心にご紹介します。

（研究所所長 広井多鶴子）



### ■ 戸野原須賀子氏 インタビュー

とのはら すがこ 旧姓 清宮

1915（大正4）年8月3日～2017（平成29）年4月29日 川崎市生まれ

1928（昭和3）年4月 実践女学校入学 1936（昭和11）年3月 実践女子専門学校技芸科卒業

1936（昭和11）～1937年度 実践女子専門学校助手

1937（昭和12）～1944年度 川崎市立向丘青年学校教諭、実践女子専門学校教授

1980（昭和55）～1984年度 社団法人実践桜会理事長 1983～84年度 実践女子学園理事

1984（昭和59）～1990年度 学園評議員 2005（平成17）年「戸野原奨学金」創設

聞き手：若松 幸子 元実践桜会会長 後藤 英子 実践女子大学生生活科学部食生活科学科准教授  
浪岡 正継 実践女子学園 学園史資料室

2009年11月28日午後、戸野原須賀子さんご自宅にて

**【若松】** 戸野原さんはどういう理由で実践女学校に入られたのですか。

実は、都立の女学校に落ちて実践に入りました（笑）。父は「女が校長してるところはどうかと思う」などと言っていましたが、入学式で下田先生のご挨拶を聞くと、「素晴らしい校長だ」「俺の目に狂いはなかった」と、すっかり感服してしまいました。

**【若松】** 戸野原さんは実践女学校を卒業後、専門学校に進まれますが、その頃、専門学校に進学する女性は、少なかったのではないですか。

はい。60人位のクラスの中から、2、3人です。中にはお茶の水や日本女子大、共立などに進学なさる方もいましたが、ほとんどは実践女子専門学校に進学しました。ただ、まれに早稲田や慶応に進まれる方もいました。

**【若松】** 下田先生はどのような女性を育てたいと思っただけでいらしたのでしょうか。

下田先生はあくまで女性は女性としての品性ややさしさを持っている必要があるとお考えになっていたと思います。でも、実践という名前の示す通り、普通の家庭の婦人も社会に出ていく人も、広い知識と深い洞察力を持っていないといけないというお考えだったと思います。

**【若松】** 当時、女性に大学の門戸が開かれていないということを下田先生はどう思っていたのでしょうか。

下田先生は、「男子には大学があるのに、女子は専門学校止まりということは不公平である」「私は必ず実践を大学にしてみせる」と言い切っていました。「男子と女子の区別があってはいけない」という強いお考えをお持ちでしたね。

**【若松】** 下田先生の授業はどのようなものでしたか。

下田先生は全校生徒、あるいは各級の生徒を講堂にお集めになり、世界地図を広げて世界情勢などをお話しされました。先生は毎日20種類くらいの新聞に目を通されて、それを題材にしてお話しされていたそうです。下田先生の授業は2時間くらいでしたが、学生はみな聞き入って、何時間でも聞いていたと思っていました。実際、もう少しお話を延ばしていただきたいと、みなさんでお願いしたこともあるんですよ。

**【後藤】** 向ヶ丘遊園から渋谷までお通いになったそうですが、当時の渋谷や学校はどんな様子でしたか。

私が女学校に入った頃の渋谷は、宮益坂を上った所からほとんどクヌギ林でした。あとは公・侯・伯・子・男爵、あるいは宮様方のお屋敷ばかりでした。ほかは学校で、國學院、実践、青山学院。今で





は想像もつかないほど静かな町でした。

**【後藤】** 実践中高の教育理念は「堅実にして質素」ですが、当時の学生生活はいかがでしたか。

呆れるほど地味でした。流行は関係ありません。西武鉄道のお嬢さん、東郷元帥のお孫さん、それから、「紫の君」といわれ、学校中の憧れの的だった秩父宮妃殿下のご親戚にあたる松平佳子さんなど、相当上流の方もいらっしゃいました。でも、みなさん、膝小僧が破れたら、継ぎあてをして着ていました。

**【若松】** 一時、実践は「皇室中心主義」だと言われました。

皇室中心主義と言われるのは、ある意味、当然だと思います。実践の敷地はもともと皇室の御料牧場を払い下げられたものです。焼けて無くなりましたけど、雨天体操場も御下賜金で建てられたものです。皇后陛下と皇太后陛下からも、時々御下賜金がありました。

下田先生は、亡くなるまで竹田宮妃様と北白川宮妃様の御用掛をお務めになっていました。なので、竹田宮妃と北白川宮妃は授業参観はもちろん、バザー、運動会、学生の演奏会などの催し物がある時にもよくお出でになりました。朝鮮の宮様とご結婚された松平佳さんも、御一家でいらしていました。先生が歌子というお名前を頂いて以来ずっと宮中にお仕えてきた結果、自然と皇室中心主義と言われるようになったのだと思います。

**【浪岡】** 下田先生がご病気になった時、学生たちは快癒祈願をしたそうですね。

はい。自然に参拝が始まりました。毎日毎日朝早く定時刻に学校に集まり、青山通りから表参道の大きな鳥居をくぐって、ずっと歩いて明治神宮の本殿まで参拝に行きました。高女、実科高女、専門学校、全部一緒に、延々長蛇の列を作って。だれも文句を言いませんでした。

**【浪岡】** 下田先生は校長室を病室にされたということですが。

そうです。下田先生がどうしても生徒に会いたい



ということで。それで、生徒たちが順番に静かに枕元まで行き、先生のお顔を拝見しました。先生はもう生徒の顔を見るお力もありませんでしたが、空気でおわかりになるのか、生徒が入ってくるととても嬉しそうな顔をなさいました。でも、これではますますご病気が悪くなるということで、無理を言って病院にお戻りになっていただいたんです。

昭和11年の10月8日に、先生が亡くなられた時は、学校の職員も学生も、みな声を上げて泣きました。1週間くらい泣き通したと思います。

**【若松】** 下田先生を知る実践の先輩方はどなたも下田先生は素晴らしい方だったとおっしゃるのですが、どうしてだと思いいになりますか。

下田先生のご人格だと思います。宮中に長く務められて身についた品格、学生や職員を思う強い気持ちとやさしさ、それから自然に備わった親しみやすさがあります。

下田先生が校長室からお出でになると、生徒は先生を取り囲むようにして、廊下の両側に分かれます。すると先生は、「元気〜」「よかったねえ」と、一人ひとりに声をかけていかれるんです。どなたにも誰彼の区別なく、近寄って話しかけられるんです。

**【若松】** 下田先生は私欲のない方で、学校の名前にご自分のお名前すら残しませんでした。

そうですね。私が一番敬服しているのは、私財を残されなかったことです。ほとんど全部、学校に寄附されました。今大学にある「無我荘」は、先生のご自宅でした。生活はまことに地味で、いつも被布を着ていらっしゃいました。皇室への出入りにはお迎えの車がありますし、派手やかな生活というのは一切お考えになりませんでした。本当に素晴らしい方だったと思いますね。突出していました。心から敬愛する価値のある方でした。

**【若松・後藤・浪岡】** 今回お話を伺って、下田先生のイメージがだいぶ具体的に見えてきました。本当にありがとうございました。

# 実践女子大学 下田歌子記念女性総合研究所

## 2020年度 研究員一覧

広井多鶴子 (所長)	清田 夏代 (兼務研究員・教職センター 教授)
久保 貴子 (専任研究員)	駒谷 真美 (兼務研究員・人間社会学科 教授)
深澤 晶久 (兼務研究員・国文学科 教授)	高瀬真理子 (兼務研究員・日本語コミュニケーション学科 教授)
湯浅 茂雄 (兼務研究員・国文学科 教授)	神木まなみ (兼務研究員・実践女子大学人間社会学部 助手)
志渡岡理恵 (兼務研究員・英文学科 教授)	小林 修 (客員研究員・実践女子大学短期大学部 名誉教授)
村上まどか (兼務研究員・英文学科 教授)	宮木 孝子 (客員研究員・実践女子大学短期大学部 非常勤講師)
織田 涼子 (兼務研究員・美学美術史学科 准教授)	関 登美子 (客員研究員・実践女子学園中学校高等学校 非常勤講師)
数野千恵子 (兼務研究員・食生活科学科 教授)	愛甲 晴美 (客員研究員・福生市郷土資料室)
大川 知子 (兼務研究員・生活環境学科 准教授)	加藤 靖子 (客員研究員・東京大学大学院)
高橋 桂子 (兼務研究員・生活文化学科 教授)	鈴木 隆一 (客員研究員・実践女子学園岩村町親善大使)
細江 容子 (兼務研究員・生活文化学科 教授)	中西 達治 (客員研究員・金城学院大学 名誉教授)
松田 純子 (兼務研究員・生活文化学科 教授)	若森 慶隆 (客員研究員・NPO 法人 いわむら一斎塾)
須賀由紀子 (兼務研究員・現代生活学科 教授)	

### 今年度活動予定

#### 学園資料の展示など

##### ■ 常磐祭

##### 1 日野キャンパス

2020年11月14日(土)、15日(日)

##### 2 渋谷キャンパス

2020年12月19日(土)、20日(日)

#### 協力事業(展示)

##### ■ 嚶鳴広場特別展示「志 三好学と下田歌子」

2020年7月23日(木)～8月19日(水)

愛知県東海市 芸術劇場・嚶鳴広場

##### ■ 「第18回 下田歌子賞」表彰式

2020年12月12日(土)

岐阜県恵那市岩村町 岩村コミュニティーセンター



詳細は、本研究所 HP でお知らせいたします。変更になる場合もございますので、随時ご確認ください。

<https://www.jissen.ac.jp/shimoda/index.html>

#### 正誤表

「ニューズレター No.10」(2018年1月)4頁 「下田先生に関連する石碑等(1) — 瓜生岩子と下田歌子」

(左列、下から9行～10行) 誤) 明治29(1896)年には藍綬褒章を女性として初めて受章する。

↓

正) 明治29(1896)年には藍綬褒章を受章する。